
一部50円です

今、求められるリーダーとは

『大船渡市三陸町の吉浜地区、約1400人の住民のうち行方不明者は1人、倒壊も4棟にとどまった。多くの家は湾を望める高台に建てられ、住民は素早く避難した。

「先祖が百年後の子孫を救ってくれた。」農業柏崎久喜さんは話す。

柏崎さんの自宅にある古びた掛け軸の脇には115年前に地区の約2割の命を奪った1896（明治29）年の「明治三陸津波」の日付が記されている。その時亡くなった柏崎家の先祖4人の名前と絵もある。被災の記憶が風化させないよ

うにと描かれたという。

1933（昭和8）年の「昭和三陸津波」の後には「家は今より高台に建てろ」といった教訓が記された和紙が作られた。

津波の被害にさらされ続けた三陸沖の多くの集落では、高台に移り住んでも、漁をする不便さから湾沿いに戻った。しかし、吉浜地区は違った。町史などによると1896（明治29）年の明治三陸津波の後、当時の村長が、低地にあった吉浜地区の集落を丸ごと高台に移し、低地を田んぼに改造したという。

海を見下ろせる高台に住む歴史愛好家の木村正継さんは言う。「こんな津波は生きていうちにはもうないかもしれない。だからこそ、孫やひ孫の代までしっかり伝承し、悲惨を繰り返さないための街づくりが必要だ。」という記事を朝日新聞で読んだ。

大変な困難を伴う移転を住民に説得し実行して行くリーダーシップに唸った。先人の教えを踏まえ、数百年先を考え、孫子の代までも安心して暮らせる生活基盤作りを使命とし成し遂げたのだ。

世界中の人々が被災地へ救援の手を差し伸べ、心配し、注視している今、日本は世界に向かって分かりやすい言葉で人々に期待と希望を抱かせるメッセージを感謝と共に伝えなければならない。日本丸の船長ならば「日本は原子力発電に頼らないエネルギー政策を推進します。津波予想地域は高台への移住を今後十年間で行い、安心して安全な国にして世界中の人々の期待に応えます。総額五十兆円を予定しております」くらいの事は堂々と行って欲しいものだ。

連載 爺捨て山 29

梵店主

七十歳半ばと思われる婦人が初めて来店された。

パブルで地上げが盛んな時に、大阪市内で営んでいた小さな手芸店が銀行に高値で売られたので、高槻で家を買って、余った金で優雅に暮らしてきたが、主人も亡くなり独りになると、言われぬ不安に悩むようになったという。金に心配は無いのだが、不安で夜眠れないらしい。

私は、彼女の話聞いてとっさに、「子供さんの事や将来の自分の体の心配など悩みはあるでしょうが、モヤモヤした気持ちを晴らすのは、死ぬ時を決めることです。○年○日○時に死にたいと決め、その為の準備と生活設計を立てるのです。そうすれば、あなたの気分はすっきりするかも知れませんよ」

というので、婦人はふっと気がついた様子で、「わかった、また来ます」

と急いで帰られた。後日、婦人が来られて、「あなたの言葉で不安がすーと消えたの、お札に服を買わせてもらおうわ」

といって彼女は、うれしそうに三着も買っつけてくれた。

「これからも買いに来るわ」というご婦人の言葉に「私もうれしいです」と応えながら、彼女は何かを、私の言葉からヒントを得てつかんだのだろうと思った。

梵店主

よっちゃんは、寝袋にもぐり込んだが眠れない。由べえの言葉が次から次へと浮かんでくる。

由べえは、東京・浅草で生まれて育った、しゃきしゃきの江戸っ子である。銭形平次で有名な神田明神を遊び場として大きくなった男だ。兄妹は姉・兄・妹

の4人で家業は袋物問屋で、彼は小さい時から勉強がよく出来、東京タワーの近くの有名進学校である芝中学校に入学し生物クラブに入部した。昆虫の観察をする為に奥秩父や丹沢の山へ毎週のように通って観察をするようになった。それがきっかけで高等部になると山岳部に入部した。

大学は東京六大学を嫌って、ヒマラヤの夢を叶うべく京都に来た変わり者なのである。当時、芝高から関西へ行く者はいなくて、彼が初めてであったようだ。彼の心を動かしたのは、よっちゃん

の大学山岳部が持つヒマラヤ遠征の実績であった。アピ、サイバルの初登頂をはじめ輝かしい記録を持っていたから、彼のヒマラヤ願望が達成出来るかも知れないと考えたのである。

彼は、コツコツと几帳面に記録する輩であったのだ。

性質で、よっちゃんのように大雑把な性格とは違う。3ヶ月間、大学の合宿所に山猿とふたりで寝泊りしながら、遠征隊の装備を研究・調査をして、必要最小限の備品のリストアップ、調達、梱包発送をしたばかりか、現地での開封やチェック、キヤラバンのポーターが担ぎやすいようにパッキングを工夫し、荷物を仕分けしていた。毎日、文句も言わずに一人でやっていた。おまけに年少者であるから食事の準備もしなければならぬ。

毎朝、よっちゃん達が気楽にタバコをすって休んでいる時も彼は装備点検や振り分けを怠る事は出来ないのである。ところが、その作業が日常的であった為に、ちょうど母親が毎日家事をする懸念して家庭を支えていてくれるように、由べえのやっている事の大きさやよっちゃんは分からなかったの

である。気づかないどころか、もっと上手くやればいいのという不満があったのである。隊長にも似たような気持ちがあった。

由べえや山猿は、学生であるから融通がきく、ついつい彼らを好きに使用、その労に報いる感謝の気持ちも忘れて文句ばかりを言っていた隊長やよっちゃん、彼らにとってはやり切れぬ先

の装備品の調達などに目が行くが、実は目に見えぬところで支えてくれている人たちこそが遠征隊を動かしているのである。

ある先輩がよっちゃんに愚痴った事があった。「金のある人は、ポンとまとまった金額を出すだけで後は何もしない。自分は金を出してはいないが、もろもろの雑事をする。周りの人は自分より金を出した人を評価する。金で人を釣って、人も金で釣られる。真実はみえにくい。」

由べえの隊長に向けた言葉は、よっちゃんに向けられた言葉でもあった。よっちゃんは、ますます目が冴えてきて眠れない。

今いくら考えてもどうしようもないことは分かっているのだが、何とかしなければ由べえの夢もよっちゃんの夢も消えてしまう。

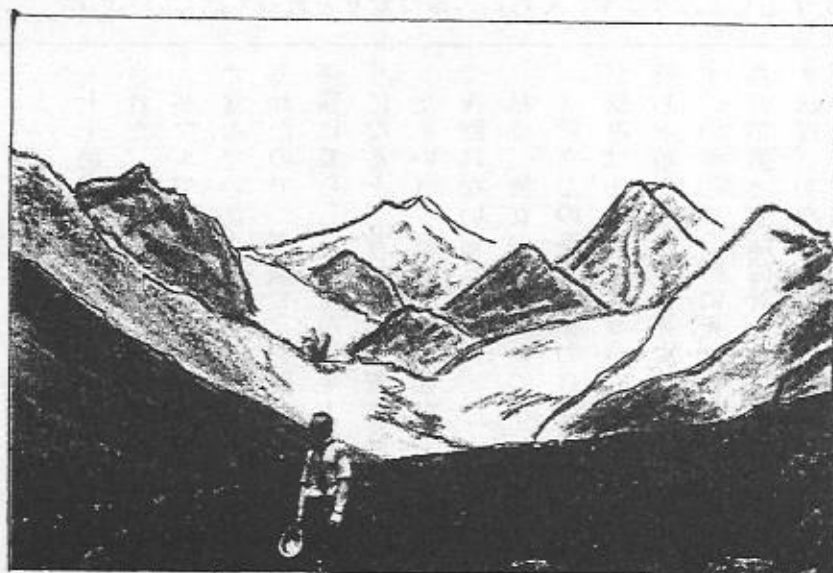
よっちゃんは、山の神に明日の天気を崩してくれと祈ろうと考えた。山登りをしている雪や風を吹かしてくれと願った事は一度もないが、明日だけはルート工作に出られないような悪天気になって欲しい。そうすれば由べえの心が再び精気をとりもどすに違いないと思った。

彼のヒマラヤへの思いはそう簡単

に挫折するはずがない。一時の気の迷いで言っただけで彼の山頂への思いは、よっちゃんよりほかに強く諦めることなど出来るわけがないはずだ。

しかし、時間が少しだけ必要だとよっちゃんは思った。一日休めば気が変わるに違いない。好天気になれば、由べえの言ったことをベースキャンプにいる、隊長や山猿に伝えなければならぬ。悪天気になれば、天気の良いに言わずに時間稼ぎができる。

「明日はどうか晴れないでくれ、雪や風よ吹いてくれ」



肺ガン療養中の義兄は東北の出身だ。しかも福島県。「芥川だより」のこの号が読者の皆さんの手元に届くころは、すっかり収束していると願うが、福島第一原子力発電所からそう遠くない、いわき市に実家がある。

幸い、実家は高台で津波の被害はなく、瓦が落ちたり塀の一部が壊れたりした程度だったようだが、原発の不安は残る。地震から十日後の今日現在も自衛隊が懸命に放水活動を行なっていて、付近の人々は避難したままだ。

姉は大阪の郊外に住んでいるのだが、「私はもう蒲団も外に干してないし、洗濯モンも出してないで」と極端なことを私に言う。健康オタクは知っているが、ここまでくると正直、ムカつく。福島の原子力発電所の放射能が大阪の姉の家の洗濯物に降り注ぐなど、ナンボ何でもありえへんやろ！と叫びたいが、姉は本気だ。そして、私のことも心配してくれる。「アంత、東京の出張がキャンセルになってよかったなあ。吸いこむのが一番恐いて、池上さんも言うてはったやろ」。池上さんって知り合いみたいに言っているが、テレビでニュースの解説をしている、池上彰のことだ。「服や手についたもんは洗い流せるけど、鼻から

入った分は肺で遺伝子食いつぶしていくんやて」。私はその番組を見ていないので、よくわからないが、それは最悪の事態に陥った場合、半径何キロという至近距離での話のはずだ。「違うで。東京の人もこっちに避難してきてんねんで」。それは、姉の家の隣のヒロイシさんちの従兄弟さんのことらしいが、姉の話の聞いてみると、東京のお金持ちや知識階層がそろそろと東京を離れていく図が目に見えかぶ。「シェルトーなんかにも入ってんじゃないの(笑)」と姉はここだけ東京弁で言う。原発のことを笑い事みたいに言ったり書いたりするつもりはないが、姉が「ケツタイな人」であるというのはわかってもらえらると思う。とにかく、発想が極端なのだ。でも、私が書きたいのは、実はここからなのだ。自分は大阪で蒲団さえ外に干していないというくせに、いわきにある義兄の実家のことは、「一番、安全なところにあんねんから」と言うのだ。もちろん、その理由はただ一つ。姉は関わり合いになりたくないのだ、夫の身内に。

常識のある夫婦だったら、「高齢のお父さんだけでも大阪に引き取った方がいいんじゃないか」という会話になると思うのだが(現実にはそうなるかどうかは別として)、姉にはそんな常識はない。

「大阪に来たりしたら、死んでしまいうんか。年寄りには住んでたところを離れさせたたらアカンねん」とすげない。確かに、そうだと思う。長男ご夫婦やお孫さん夫婦とのんびりと暮らしておられる実家のお父さんが、姉んちに來られる可能性などゼロなのだが、自分たちの放射能被害をそこまで懸念しているくせに、「夫の実家は、いわきではあるが、安全なところにある」と言い切る姉に私はのけぞってしまふ。

本音と建前という言葉があるが、姉の辞書に「建前」という言葉はない。今回の大震災から二日目に、大阪市内に住んでいた伯母が亡くなった。私たちの亡くなった父の兄(故人)の奥さんだから私たちと血のつながりはないが、伯母である。母がそれを知らせたら、姉は「お葬式なんか行けへんで。私には関わりたくないことやから」と言ったそうで、母は激怒していた。「うちのお父さんのお葬式に、あそこの子どもたちはみんな来てくれたのに、関係ないっていうことはないっ」と、私に怒っていた。高齢になって、いつ子どもたちのお世話になるかもしれないと思うようになった母は、私の悪口は姉に、姉への憤まんは私に言うようになった。つまり、直接、本人に言わないで、カゲで文句を言うのだ。昔から、母は争いごとが苦手で、カゲでプチプチ言うタイプだったから、今に始まったことではないが、今回の母の憤りはすごかった。そんなとき「そうや、そうや！ねえちゃんはおや」と言っていてやれば、母も気が晴れるとわかっているのだが、うちは次女(私)も性格が悪い。「親の顔、見たい？ 見たいやろお？」とケロケロ笑ってしまう。母は弟にもそう言われたらしくて「ほんまに、育て方、まちごうたわ」と吐き捨てていた。

結局、伯母のお葬儀はお通夜に弟が行き、告別式には母と私が出向いた。つまり、うちの姉はこれぐらい建前無視の非常識人なのだ。別に自慢しているわけではないが。

葬儀から三日後ぐらいに姉の家に電話したら、姉は買物で留守で、義兄が電話に出た。「すみませんねえ、ウチは常識的なおつきあいができなくて」と義兄が言ってくれたが、悪いのは千パーセント姉だから、私も謝っておいた。「すみませんねえ、ウチのねえちゃん、奇人変人です」。

一方、建前人間の母は「長女は夫がガンで家がゴタゴタしているので、お葬式に参列できなくて、ということにする」という言い訳を用意していたが、だれも姉のことなど聞いてくれなかった。(A O)



わがみ仏よ

具志清

高井は、いつものように夕刻帰社し席に腰かけると、机上に重ねられた書類の中から通常より一回り大きく分厚い一通の封書を手にした。おやつ、と思った。差出人、星宮芳枝という名が初見で、その住所が里見京子と全く同じである。ただ室の号数が異なるだけである。ともかく封を切る。便箋の他に白い紙で包んだものが出てきた。表に高井隼人様、裏に里見京子とある。封筒の筆跡と同一である。それはそのままにして便箋を開いた。

拝啓 いきなり失礼致します。私は里見京子さんと親しくさせて頂いた者でございます。

京子さんがお亡くなりになりました。余りにも急なことなのでどのようにお話していいのか、と迷っております。

高井は、啞然とした。何だ、これは！

交通事故です。京子さんはその日お休みの日でした。お客様の誘いでドライブに出かけられました。その帰りに事故に会われたのです。

高井は、読むのを中断した。事態が飲み込めず、手が震えた。便箋と包みを封

筒に入れ直し上着の内ポケットに収めた。そして常の表情のまま、事務処理の作業をした。半時ほどで終えた。退社するために席を立った。

鳥丸から四条通りを東へ歩いた。直接帰宅する日は鳥丸からバスで北上するのだが、時には四条河原町界限で、独り或いは付き合いで遊興する。そんな日は当然気持ちは軽い。しかし今は違う。北側の歩道を行き交う人々の間を縫う足取りは重い。

高井は、胸中、手紙の言葉を反芻した。京子さんがお亡くなりになりました。：。交通事故です。：。どうということなのだ！

名曲喫茶みゆーずへ入った。コップの冷水を抱え、顔なじみの少女が迎えた。笑顔で珈琲のオーダーを聞いて下がる。無論、少女は高井の心中を知る由もない。やがてその少女が珈琲を供しに来て、愛嬌を残して離れる。

高井は、一口嚙ると、封書を取り出し、包みはそのままテーブルに置き、便箋を開いた。

京子さんは、そのようなお付き合いはしないのですが、相手の方がお店にとって大変負担にして頂いている会社の重役さんでした。お店の主人のたつての頼みもあって、出掛けられました。そして帰りの国道で無謀運転の乗用車

に衝突されたのです。重役さんは軽傷ですみましたが、京子さんは意識不明で病院へ運ばれました。でも私たちが駆けつけた時には、呼びかけに微かに応じておられました。それも束の間でした。

ああ、神も仏もありません。

「お母さん…、お父さん…」と小さな声で呼んでおられました。そして、「もう一度、京都へ…」この言葉が最後でした。

今、京子さんの机に向かって書いておきます。お茶目なところもあったあの方が懐をそつと開け、わつ、と入ってきそうな気がします。

京都ではご親切にして頂いたそうです。京ちゃん、隅に置けないな、と冷やかすと、ふふ、と笑っておられました。京子さんは、私たちみんなの星でした。悪いお酒で荒れているお客様も、あの方の執り成しを受けるとご機嫌を直したものです。

京子さんは、身寄りのない方です。お母さまの故郷には血縁の家は全く無いようです。お母さまのお葬式もお店の主人の御厚意で行われました。京子さんが小さなお仏壇を求め、お骨を安置し御守りしていただきました。ああ、そのお母さまのお側に京子さんが、あまりにも酷すぎます。

京子さんのお机の上に高井様への書きかけのお手紙が残されておりました。

どうしようかと迷ったのですが、同封にしてお送りします。

京子さんとお母さまのご遺品は私たちがみんなで形見分けすることになりました。と申しますのは、他所様へ売却する事も出来ません。みんなで思い出の品々として大事にしたいのです。ただ、京子さんと御両親、特にお父さんが書き残されたものが沢山あるのですが、それをどうしようかとみんなで相談しました。

高井様に引き取って頂きたいのです。勝手なお願いです。実は、高井様のことは京子さんからお聞きしましたし、また、大変失礼とは思いましたが、京子さんへのお手紙も読ませて頂きました。まことに不思議な御縁ですね。私たちが保管しているよりは高井様のお手元にあるのが一番良いことだ、とみんなで考えました。御承知下さいますれば送らせて頂きたいと存じます。取り急ぎ悲しいことをお知らせすることになり、まことに心残りでございます。失礼致しました。

高井は、読み終えて茫然とした。先刻から珈琲カップの傍らに置いてある包みを手にした。里見京子の名を凝視した。包みを開けた。

その筆遣い、まさに里見京子を書いた手紙である。へ

← 拜啓 八月に入って朝夕なんとなく

秋が近くなってくるような気がします。今日はとつても忙しかったのです。

わたしはお店の会計事務が本職なのですが時には宴会場へ派遣されます。なんだか母の後任のような形になりました。

でも嫌ではありません。母と同じように水商売に向いているのかしら。

今夜は十二時を過ぎてからお店の車でアパートまで送って来てもらいました。

この頃好景気ですからね、会社や団体などの宴会が多く、大変なんです。

真夜中、机へ向かっていると、しーんとして、さつきまでの喧嘩がうそみたい

です。

高井様、あの日からもう半年も過ぎてしまいましたね。ずいぶん昔のよう

な気がしますのはなぜでしょうか。いつももう一度京都へ行きたい、と思っ

ているからでしょうか。

今年いっぱいはお休み取れそうもありませんので、来年の二月には必ず休暇を頂戴します。そして雪の比叡山へ

登りたいのです。

父が母へ贈った詩があります。

あはれ
比叡の霧深き山路
言の葉少なく
君と辿れば
あはれ

鐘の音余韻嫋嫋

老松巨杉の樹間へ沁みゆく
あはれ

わが青春わが思い
明日知れぬわが命

今日なにをか語らむ
あはれ

千古の不滅の燈明
わがみ仏よ

薬師如来
守り給はむ

君が幸

上手な詩ではないでしょうが、父の信実と情念がしのばれ、心が熱くなります。

高井は、いい詩だ、と心底から感じ

た。あの戦争末期、学徒出陣を目前にして、こよなく愛している女性の幸せ

のために、比叡のみ仏に祈りを捧げる

学生の心情がすなおに表現されている

ではないか。

高井は、京子の後の文は席を変えて

読もうと思ひ、みゆうずを出た。京子が丸善の横をぶらぶら歩いた小路を逆

に行き河原町へ出、車道を渡り、夏の宵のさわめく新京極の裏通りまで来た。行きつけの酒場の暖簾をくぐった。此処でよく独酌を楽しむが、今宵はつらい酒を飲むことになる。

寺田寅彦の警告

「昭和八（一九三三）年三月三日の早朝に、東北日本の太平洋沿岸に津浪が襲

来して、沿岸の小都市村落を片端から薙ぎ倒し洗い流し、そうして多数の人

命と多額の財物を奪い去った。明治二

十九（一八九六）年六月十五日の同地方に起こったいわゆる「三陸大津浪」と

ほぼ同様な自然現象が、やく三十七年後の今日再び繰返されたのである」

（津浪と人間）

その七十八年後の今年三月十一日、大津波が東北の太平洋沿岸を襲った。いくつもの町や村が壊滅した。二週間経

つたいまも死者、不明者が増え続けている。

マグニチュード9という震度は日本が初めて経験する大きさだそうだが、

明治のときも昭和のときもそうだったように、地震そのものの被害はあまり

大きくない。阪神大震災よりもはるかに小さい。甚大な被害をもたらしたのは津波である。明治の津波は二十八日、

昭和の津波は二十八日、今回は十四日だそうだ。「想定外の天災」などではない。

科学者、寺田寅彦はいう、『自然』は過去の習慣に忠実である。地震や津

浪は新思想の流行などに委細かまわず、頑固に、保守的に執念深くやって

くるのである。……科学の方則とは畢竟『自然の記憶の覚え書き』である。

自然ほど伝統に忠実なものはないのである」。

「地獄」が起きたことがひんぱんに記されている。鴨長明は『方丈記』で元禄二（一一八五）年に

都を襲った「大地震」についてくわしく描写している。

新しいところでは、幕末の嘉永、安政年間に日本列島を揺さぶりつづけた

大地震の連鎖がある。黒船が来航した嘉永六（一八五三）年二月に相模大地

震、翌七年六月に近畿大地震、同年十一月四日に駿河、遠江、相模一帯を大

地震が襲い、翌五日には西日本一帯で大規模な地震が発生した。そして翌年の安政二（一八五五）年に起こったの

が、江戸で七千人を超す死者を出した安政大地震である。

日本列島では太古より、地震や津波が「頑固に、保守的に執念深く」襲ってくるのである。

では、理不尽に襲いかかる天災にたいして、日本人は手をこまねくばかり

で、厄払いや祈禱にのみ頼っていたのかというところではない。

関東大震災の被害状況を調査した寅彦は、そのときの見聞をもとに次のようにいう。

「昔の人間は過去の経験を大切に保へ

く存し蓄積してその教えにたよることが
はなはだ忠実であった。過去の地震や風
害に堪えたような場所にのみ集落を保
存し、時の試練に堪えたような建築様式
のみを墨守して来た。それだからそうし
た経験に従って造られたものは関東震
災でも多くは助かっているのである」

「信州や甲州の沿線における暴風被害
を警見した結果気のついた一事は、停車
場付近の新開町の被害が相当多い場所
でも古い昔から土着と思わるる村落の
被害が意外に少ないという例が多かつ
た事である。……旧村落は『自然淘汰』
という時の試練に堪えた場所に『適者』
として『生存』しているのに反して、停
車場というものの位置は気象的条件な
どということは全然無視して官僚的政
治的経済的な立場からのみ割り出して
決定されているためではないかと思わ
れるからである」(「天災と国防」)

昔の日本人は自然に従順で、自然に逆
らうようなことはなかった。ところが、
「文明が進むに従って人間は次第に自
然を征服しようとする野心を生じた。そ
うして、重力に逆らい、風圧水力に抗す
るようないろいろの造営物を作った。そ
うしてあつぱれば自然の暴威を封じ込め
たつもりになっていると、どうかした拍
子に檻を破った猛獣の群衆のように、あ
ばれ出して高樓を倒壊せしめ堤防を崩
壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす。

その災禍を起こさせたもとの起こりは
天然に反抗する人間の細工であると言
つても不当ではないはずである」

寅彦のこの言葉のつづては、八〇年
の時を超えてそのまま現代のわれわれ
を撃つ。津波堤防ひとつ思い起こして
みればいい。

もうひとつ、深刻な問題がある。寅
彦の時代では予想をはるかに超えた魔
物の登場である。今回の地震を契機に、
ついにあの悪魔がその本性をあらわし
たのだ。いままでにくわぬ顔で、「安
全でクリーンですよ」と装っていた原
発という、地球上でもっとも強力で最
悪な毒をつくりだす悪魔だ。この悪魔
は津波というムチのひとたちで、怒り
狂ったように暴走をはじめた。放射線
という猛毒をたれ流しながら。(つづく)

(猿)

サラリーマンエッセイ 37

東日本大震災に際して

明石幸次郎

想定外の巨大地震の後に来た、想定
外の大津波による壊滅的な被害、更に
は、想定外の被害を受けた原子力発電
所の機能不全による放射能災害の恐怖
と住民の避難など……。被災された
多くの方々は、断続的に起こる余震の
恐れ、寒さと絶望の中、受難の日々を

過ごされています。被災された方々
の力になれない自分としては、些少
の義援金で自分の気持ちを落ち着か
せる事しか出来ません。

今回の地震で被害を受けなかった
関西圏に住む我々も、あの神戸大地
震の記憶が甦り、地震列島とも言え
る島国に住んで地震から逃れられな
い身を思えば、明日はわが身にも一
一との想いがよぎりました。

しかも、東南海巨大地震が30年
以内に起こると専門家が予測する状
況を見ると願わくば、自分が死んで
から起こって欲しいとエゴも出ます
が、その時の子供、孫達の苦難など
を想像すれば、そうも言っておれま
せん。

かと言って、地震の取り越し苦勞
ばかりして、日々を過ごすのも残さ
れた人生がつまらなくなりません。起
こった時はその時として、もし、自
分が生きて残れば残ったで、残った人
どおし、お互い助け合える人間関係
を日頃から作っておくことの方が、
不安から自分だけ非常の為の買いだ
めする利己心に走るよりは大事なこ
とだと思います。

今回の地震と津波に襲われて、何
もかも無くされた被災された方のこ
とを自分自身に置き換えた時、大学
3年の丁度今頃、当時住んでた銀閣

寺の近くの下宿が火事で丸焼けになりました。そ
れは、今回、被災された方々との重みと失われた
規模は全然比較にはなりません、身一つで焼け
出され、実家から持ち込んだ21歳までの思い出
のモノは全て、灰となってしまいました。その時
は、大きな空虚感で涙も出ませんでした。不謹慎
ですが(被災された方々とは被害の次元が違いま
すので)、暫く時間が経つと、学生の身一つの気
楽さからか、若かったのか、鈍感なのか、21歳
までの自分からリセット出来、今までのモノ、精
神的な束縛と言うか、もやもやした自分がこの災
難で生まれ変わった様な、人には説明出来ない気
持ちになりました。

それで、愚妻にこの頃、言われることは、あの
21歳から、溜め込んで本棚から溢れる本、雑誌、
週刊誌、その他情報誌、筆筒に詰め込んだ洋服、
古くなって使わなくなった登山道具などを、
還暦を節目にして、「断捨離」を実行して、いま
までのモノとココロの整理をしたらどうか、と言
う事です。

人生、日常生活において自分にとって本当に必
要なモノかを見直し、思い切つてモノを捨てて、
絶つ、諸々の人間関係、特に今までの会社関係の
義理だけの人間関係から離れることも、モノだけ
でなく、サラリーマンを長年やって来た我々、お
っさん達にとっては、愚妻に言われるまでもな
く、必要で大事な事かも知れません。身軽になる
ことは、同時に、いつ起こるかも知れない災害が
起こった時、沢山のものを一度に無くしてしま
う絶望感、空虚感からも多少は免れる、一番の術
であるかも知れません。

「回向(えこう)」

「賢治のいうデクノボーという生き方で思うのは、法華経などを専門に学んでいない人が突然、法華経の要諦をつくような思いもよらない言葉を発することがあります」

——賢治がそうなんですか

「賢治は病に苦しみもがく生活の中で感性が研ぎ澄まされていたのでしよう、初めて法華経を読んだ時に歓喜で涙が止まらなかつたと言われています。安閑とした生活では感性が鈍ってしまふものです。日蓮宗の僧侶でも、賢治のように泣くほど感激する人は稀でしょう。」

——病にもがき苦しむ人、人生に深く悩む人、そういう苦悶に生きる人こそ、法華経は救済の光をあてているということなのでしょうね。

「私が寺を破門された後、父は私を身延山の丈六堂へ連れて行き、金像の前に坐らせました。父が勤行につとめ励んでいる間、どういうわけか私は頭を上げられずにいたのですが、ふと横を向くと居眠りしている僧が見えた。父がその僧に気づくなり、『このように真剣味がない世界に入りたいのか』と声を荒げて私にいいました」

——寺の跡継ぎで仕方なく修行してい

る大方の僧は緊張感が足りないのでしょうかね。

「それから管長に会いに行き、出家したいという私の願いを告げると、『女人は真剣だから、いいんじゃないか』と言いました」

——妻帯を当たり前にしている男が出家するのと、女性が髪の毛を切り落とし尼僧になるとでは、覚悟がちがいますね。

「身延には、偉い人がいるはずと思い、管長を隠居した上人を訪ねました。応対に出た奥さんに、『主人は寝たきりなので面会出来ません』と言われたのですが、事情を話していると奥の間から『入って来い』と声がして、寝室に通していただきました。上人は私の顔を見るなり『これからどう生きていきたいのか迷っているのだな。今日立ち止まって改める事があれば即刻やめる事。一ヶ月もしたら分かるよ』と言ってくださいました。」

——初めて会って分かるのですか

「上人の言葉を聞いて何が起るのか。縫製工場の経営も順調であったので見当もつかなかった」

——それが高知・南国市の藏福寺の修復だったのですか

「そうです。思いもかけない友達から誘われて遊びに行った寺で、老いた檀家集に懇願されて大工事をすることに

なったわけですよ」

——大変な金と時間、人生をかけた事業であったが、出来上がればお払い箱で居場所はなくなった

「振り返れば何だったのかと思います。が、今、吹田でこうして暮らしておられるわけだから間違った事をしていたのではなかったと思っています。」

回向という教えがあります。自分が進んでやるよりも、みんなの意見を聞いて世間を知り、人の為になることを考えて実行する。人がなす悪い事もよい事も利息が付きまします。私が元気で生きていられるのも南国市での利息が残っていて助けられていると考えています」(意)

俳句

土田 裕

- この街に狸住むてふ草靡
- 瑠璃色の空どこまでも暮春かな
- 日もすがら天声のごと桜散る
- 五月雨に家も草木も淡くなり
- 玉椿散り敷く紅を掃き惜しむ



「震災3」

三月十一日に起きた東北関東大震災への政府の対応は速かった。

翌日から四万人の自衛隊員が被災地に入り、三日間で九千七百人も救助した。

丸四日間も自衛隊が来なかつた阪神淡路大震災とは大違いだ。自衛隊員は今、二十万人も救援活動をしている。

福島原発への対応は兎も角、自衛隊導入に付いては菅総理のリーダーシップは合点だろう。

きっと阪神淡路大震災から得た多くの教訓が生かされているに違いない。東北関東大震災では未曾有の犠牲者が出たけれども、不幸中の幸いだった。そう思うと少しは救われる。

速い救助の効用は他にもある。治安が乱れないことである。

阪神淡路大震災では一時期、無政府状態になり窃盗や強姦が横行した。この話は警察関係者から聞いた。

人の弱みに付け込む火事場泥棒や性犯罪者は、この世で最も唾棄すべき人間だ。強姦された女性は心の傷が癒えることなく、神戸でひっそり生きている。《龍》



なつかしい昭和時代

私が小学校の頃、我が家では、セイモン払いが始まると、餅つき準備。母が井戸水を汲み上げて、もち米を洗い、水気切りから始まり、小重板（餅箱）洗いは私の仕事。

とり粉引き石臼は庭に安置されているので母の仕事。それぞれ持ち場が自然に分担されていたので、だまってその場についていたな。お正月には綿入りの着物、歯の高い下駄を用意してくれて、よろこぶ顔を見ていた。

羽子板を持ってカタカタと下駄を鳴らしながら、友達と羽根つきをする。男の子は、田圃が雪で真白な中で凧上げ合戦をしている。小さな子供は、コマ回し、みんな寒さなんかそっちのけ。それぞれに「お正月早くこい」と歌にあるように待ちこがれた時代だった。

みんな豊かな生活ではなかったけれど、明日への希望に満ちあふれて生きていた。

あれから半世紀、平和で不足のない時代が来て、あつという間に人の心にまで変化が来て、隣の人は何をする人ぞ。

春夏秋冬のけじめさえつかないようなファッションに圧倒されてしま

う。この先、どうなっていくのか。楽しいかなような、怖いような。

私たちにも、欲しいような予算のおもいやり。

楽しさを味わうにも苦勞が必要

生来の慌て者が、年とともに高じてきた。それと同時に物忘れも追っかけてくる。

「なんでこうなるの」。息子に声をかけて、ちよつと首をひねり触ったら、コチコチと動く。「説明書をよく読むこと」と一言。トコトコと帰ってしまった。

こうして一日も流れ、そして過ぎてゆく。今は、みんなが長命になり九十才、百才決して稀ではなくなった。

長命だからボケの心配、寝たきりになる怖さ、若い人たちの足手まといになるのではないかという不安、そんな思いはどの老人の胸の中にもあるはず。昔は毎日が敬老の日だった。

一人一人の人生経験が重みを持ち、老人の言う事には頭を下げる姿勢があつた。



私は思う。今年はどうして元気で歩いているけれど、来年は、友達も毎年同じ事を思っているのか、自然と口に出て、アツハア、と笑いにこまかして、目の先に広がる街道を眺めて社寺参りをするのである。

編集後記

東北関東大震災で被災に遭われた皆さんに心からお見舞い申し上げます。

阪神淡路大震災の時に困った事が鮮明に脳裏に浮かんできます。今回の震災は史上稀に見る大惨事で世界の人々が支援の輪を作り注視しております。

便利な生活に潜む危険性をあらためて考えさせられました。百年に一度のような自然災害に対して、目先の生活に追われている私たちは、対策をいつい後回しにしがちです。費用のこともあり希望的観測をしまいま

しかし、自然の脅威は私たちの予想を超えて襲って来た。日本の地勢的な状況を考えれば、地震や津波は避けがたく今後起きる可能性は大きい。予防的な方法としては、二十メートルの堤防を造るか、高台へ移り住むか。どちらを選ぶにしても大変な費用がかかる。原発にしても代替エネルギーを開発しないと簡単には全てを停止に出来ない。十数年の期間と多額の費用が予想される。

私たちは、大きな決断・覚悟を今迫られている。日本の動向は、世界の未来に大きく影響を与え人類の将来をも左右します。この大事な時、一番重要な事は、正しい情報であります。私たちが判断する為の基になる情報が隠されて一部のみに独占されないように、たとえ素人に理解しにくいものであっても、全ての資料を開示して私たちの判断材料にしたい。マスコミや一部政治家の情報操作だけは絶対にあつてはならない。世界の人々が期待していることでもある。(眞)

『人気のデザイン』

9

黒の正絹パンツ

*

普段にもフォーマルにも着用でき着物地の黒は最高です。



着物から服を仕立てます

荒~ぼん~